
死神さんと365日

ブッチャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神さんと365日

【Nコード】

N5594G

【作者名】

ブツチャー

【あらすじ】

何となく退屈な毎日を送っていた高校生、宗介の元に死神を名乗る偉そうで常識はずれな美少女が現れた。そんな美少女に私の物にするから一年後に殺すと言われて、宗介の生活は一変……は、あまりしなくて、死神さんと同棲しながら幼なじみの子や従姉妹達と楽しく暮らすファンタジーラブコメディ

初日の死神さん 前編

6月のジメジメした梅雨が終わり、高校生活最後の夏が始まった

そう、始まった。……始まったのだが特に何も無い

予定も無いし、お金も無い。ついでに彼女もいない（重要）

今年もいつものように平凡な夏になりそうな感じが、ビシビシとしてくるよ

98%の諦め。残りの2%は何かいい事ないかなーってな事を考えて、一日一日が過ぎてゆく

「……はあ」

ため息を付きつつ、布団の中でごろごろしていると、玄関のドアが開く音がした

誰が入って来たのかは見なくても分かる。俺が住んでるアパートの大家……の娘

「やっぱりまだ寝てる！ 起きて、宗介！！」

「起きてるよ。ただ起きたく無いだけで……」

「おーきーろー！！」

布団を無理矢理引っぺがされた

「ひ、酷いな！」

抗議の声を上げて起き上がると、美麻は俺を布団から押し出し、素早く畳む

「おはよ、宗介」

ニコツと爽やかな笑顔だ

「……………今、何時？」

こんな起こされ方をされるほど時間ギリギリだとは思わないんだけど。枕元においてある携帯を開いて確認

「まだ6時じゃないか！」

「そうだよ。それが？」

「それがつて、ミアなあ」

「はい、これお弁当。どうぞ」

「あ、どうも」

猫の絵が付いた、可愛らしい柄の包みを渡される

「で、これ宿題」

「あ、どうも」

次にプリントとノートを渡された

「それでちゃぶ台」

美麻は壁に立てかけてあるちゃぶ台を組み立て、俺の前に持って来る

「それじゃ、お願いしますせんせ」

そう言っつて俺の向かいにチヨコンと座る美麻

「……………ええと、よく理解出来ないんだけど？」

「まずは理解する努力をしよう」

「……………宿題？」

「頑張つて！」

「……………弁当？」

「報酬」

「み、美麻？ まさか」

「宿題、よろしくお願いします」

「宿題ぐらい自分でやれつて！」

「自分でやれたら頼みに来ない！」

ぎ、逆ギレ！？

「……朝食も作れよ」

「うんうん！」

「……はあ」

ため息しか出ないや

それから作ってもらったトーストとハムエッグの朝食を食べ終えて、
美麻に宿題を教える

「これがこれで、あれがあれ」

「……そ、その心は」

「答えぐらい自分で出せ」

ぶーぶと文句を言う美麻を無視

「ぶーぶ」

「……」

「ぶーぶ」

「だから公式に当て嵌めれば良いだけだって！」

あゝ面倒臭いなもう！　いつそ答えを言いたいよ！

自分の忍耐を褒めつつ、美麻に宿題を教え終わった頃には八時を過ぎていた

「……………もう学校へ行く時間だよ」

貴重な朝のまるやか時間が……………

「ほら美麻、家に戻って学校へ行く準備しろよ」

「はい、せんぱい！」

美麻をアパートから追い出し、俺も準備をする

顔を洗って、制服に着替えて……………

「よし」

準備完了、さあ行こう！

ささやかな我が城、1DKのアパートを出てみれば、階段下には制服を着た美麻の姿

「早いな」

「着替えて来ただけだから」

美麻は直ぐ隣にある自分の家を指差す。庭付き2階建ての立派な一軒家だ

「相変わらずだね」

昔と変わらない、猫っ毛のショートヘアー

美麻はスプレーで形を整える事ぐらいしかしないし、化粧も一切しない

「早く学校行こう?」

「そうだね」

もう結構ギリギリだ。俺は美麻の横に並び、学校目指して歩き始めた

アパートから学校迄は、歩いて15分

駅前を通り過ぎ、大通りから別れる小道。その小道を真っ直ぐに進んだ所に学校がある

その途中には大きな桜の木が一本だけ植えられている遊歩道があり、それを抜けたら今度は長いトンネルに入る

トルネルを通る車は少ないが、中はいつも排気ガス臭い。換気が悪いんだろうな

「それでね、宗介」

「先輩」

「うっ……宗介……せんぱい」

「うん」

学校では先輩を付けないと会話してやらない事になっている

「ええと……それで山下先生がね、カツラをね」

「てか、あの先生カツラだったの!？」

衝撃的な話を聞いて驚いていると、あつという間に学校前へ着いた

「それじゃ、弁当ありがとう」

「こっちこそだよ。ありがと、せんぱい」

西校舎の昇降口で美麻と別れ、直ぐ側の階段を使い三階へと向かう

この学校は東と西に校舎があつて、三年は東西の三階を利用している。一年の美麻は一階だ

「一年と三年を逆にすればいいのに……」

なんて文句を言ってみるが、一昨年は逆の立場だったのだ。これ以上愚痴は言つまい

黙々と階段を上りきり、自分の教室へと入る。教室内は既に殆どのクラスメートが来ていた

「ウオッス！」

「ああ、おはよう」

教室の一番左奥、窓際三番目。それが俺の席。その席に座ったと同時に、前の席の直太郎が声を掛けてきた。三年になって新しく出来た悪友だ

「今日も暑いな」

「そつだね。授業やる気無くすよ」

「ま、もうすぐ夏休みだし、それまで我慢しようぜ！」

「そつだね」

高校最後の夏休み……か

「ただ、その前にテストがあるんだよな……」

「……………思い出させないで欲しいな」

今回は余り勉強してないんだ

「よ、宗介。元気か」

「あちー。マジだりー」

俺の席に集まって来た友達と適当に会話をし、チャイム後のホー

ムルーム。そして始まる1時間目、日本史の授業

今日も今日とて代わり映えは無いけど……

そっちの方が良いのかも、なんて思ってみたり

「え〜はい、真田。次の問題を宜しく」

「はい」

退屈だけど不満は無いし
ね

いつものように授業をこなして、いつものような昼休み。弁当箱を開けると、中身は俺が1番好きなノリ弁当だった

「お〜」

オカズも鮭にタマゴに肉団子と、素敵チヨイスだ

「いただきます!」

あつという間に弁当を食べ終え、これまたあつという間に午後の授業も終わる。そして、あつという間の放課後

直太朗にゲーセンにでも行かないかと誘われたけど、金が無いのでお断り

これから真っ直ぐ帰る訳だけど……。今日もやっぱり平凡な一日だった

ま、平凡が一番か

なんて達観してみたりして……

「おい」

「はい？」

アパートへの帰り道。トンネルを抜けて駅前に続く道を歩いていたら、突然後ろから呼び止められた。振り返ると、美麻と同じ年ぐらいの女の子が立っている

その女の子は、着ているワンピースも、腰まであそような長い髪も、少し吊り上がった大きな瞳も、全て黒。ただ肌は凄く白くて……

めちゃくちゃ可愛い!!

「えっと……な、何？」

み、道でも聞かれるのかな？

「お前、殺すから何かしたい事があるなら言え」

「……………」

は？

「……………おい、聞いているのか？」

「ま、間に合ってます!」

「間に合ってる? 私の他に? そんな筈は……………ん?」

女の子が何やら考えている隙に、俺はダッシュで逃げ出す

「こ、こら待て!」

「待たないよ!」

夏になると危ない奴が出て来ると言うけど、あんなに可愛い子が!

「ちくしょおおお!!」

少し期待してしまった俺が恥ずかしい!

俺は叫びながら駅前に向かって、ひたすら走った

そして駅前。急行が止まらない駅の隣には、不釣り合いな大きいデパートが建ってる

駅前の車道は車が結構走っていて、人通りもほとんどだ。俺は、乱れる息を整えながら信号が青になるのを待つ

「……………此処まで来れば」

恐々しながら周囲を探る

右……………左……………後ろ

「ふう」

どうやら逃げ切れた様だ

「まったく……」

何だったんだろ？

ため息をつくと同時に、とつりゃんせのメロディーが響く。信号が青に変わったのだ

さて、気分転換にデパートのカフェでお茶でも飲んで……

「……………え？」

正面を見て、俺の息は一瞬止まる。その原因は先程出会った黒い女の子の姿だ

彼女は道路を挟んだ向こう側に居て、こちらを無表情に見ている。しかし俺は彼女本人よりも、彼女の右手に目を取られていた。それはとても大きな、女の子の身体よりも大きい鎌……

「か、鎌!？」

声を上げた俺を、隣のおじさんは訝しげに見た

「か、鎌!？ 鎌ですよ鎌!！」

そんなおじさんに、俺は鎌を指差しながら足に縋り付く

「ぬわ！？ な、なんだお前は！！」

おじさんは俺を突き飛ばして早歩きで駅の方……彼女が居る方へと逃げ出した

「な、なんで！？」

なんで誰も騒がないんだ！？

突き飛ばされ、しゃがみ込んだ俺をジロジロと見下ろす周りの人達
対して俺なんかより明らかに異様な彼女の事を、誰一人として見ていない

「な、何で？」

「今、私の姿はお前にしか見えない」

「うわ！？」

7、8メートル離れているのに、まるで直ぐ隣に居るかの様に、女の子の声が届いた

「そう怯えるな。別に取って食べる訳でも無いのだから」

ゆっくりと近付いてくる女の子。逃げようとしたが、足が震えて立てない

そんな俺に向かって、彼女は鎌を振り上げた

「や、やめっ!?!」

まだ死にたくない!!

思わず目をつぶり、顔を俯かせた俺に、再び声が掛かった

「どうだ?」

「……………え?」

「察しが悪そうなお前の為に、わざわざ鎌を出してやった。感謝しろ」

恐る恐る視線を戻すと、彼女はやっぱり無表情に俺を見下ろしている。鎌はもう持っていない

「私は死神だ。鎌を持つ間、人間には見えぬ」

「し、死神……………さん?」

「お前は特別だ。私に見定められた不幸を喜んでもいいぞ」

「と、特別……………ですか」

「ああ。良かったな、お前」

「……………」

こうして、俺の平凡な日々は突然ぶち壊されたんだけど……………

「……やっぱり平凡な方がいい」

初日の死神さん 後編

デパート三階のカフェ。俺は抹茶フロートとチョコレートパフェを
店員に頼む

俺の向かいには、チョココンと座る女の子

「……………」

「……………？ なんだ、ジロジロと」

「あの……………死神さん？」

「なんだ？」

俺は頭がどうかしてしまったのだろうか？

「お待たせしました」

ウェイターのお姉さんがパフェと抹茶フロートを持って来た

「パフェのお客様は？」

「あ……………。そ、そっちの子です」

「はい」

お姉さんは何の躊躇も無く、パフェを女の子の前に置く

「や、やっぱり見えてるんだ」

と言う事は彼女は俺が生み出した妄想では無く、本物で……

「……………何だこれは」

お姉さんが置いていったパフェを、女の子は首を傾げながら見つめている

「あ、それパフェです。スプーンでアイスとかをすくってお食べ下さいませ」

敬語になってしまう

「……………む！」

死神？　さんは疑心暗鬼な表情で一口目を食べた後、黙々とパフェを食べ始めた

「お、美味しいですか？」

「……………中々どうして侮りがたし」

長い髪をかきあげて一生懸命パフェを食べている姿は普通の女の子に見える。しかし何だろう、どこも無く迫力が……

「おい」

突然顔を上げた女の子。吊り目の瞳がギロリと俺を見据えた

「あ、あの」

「何だ」

「死神さん？」

「ああ」

「……………本当に死神さんなんですか？」

「ああ」

「本当に、本当？」

「ああ」

「実は冗談とか……………」

「私は余り冗談を言わないぞ。真面目なのだ」

死神？　さんは仕方ないかと呟いた後、立ち上がって右手を振った。すると、右手にさっきのデカイ鎌が！？

「どいてろ」

「は、はい？」

女の子は鎌を肩に担いで構えた

「な、なにを！？」

「別にどかなくても良いが」

「どきます、精一杯どきますー!!」

慌てて椅子から立ち上がると、すかさず大鎌振られた!

「ギヤー!?!」

か、掠った? 腹に掠った!?

「お前には当たらん」

つまらなそうに言い、女の子は何事も無かったかの様に椅子へ座る。その手に鎌は無く、代わりにスプーンが握られていた

「い、今のは一体……」

喉がカラカラだ。俺も座り直し、水を飲もうとコップを持つ

「えっ!?!」

持った瞬間、コップは半分に割れた。そして水がこぼれる

「こ、これは?」

手の内にある半分となったコップを見ると、何かとんでもなく鋭い物で切られた様な跡があった

「お待たせしました。あっ! 大丈夫ですか、お客様?」

「は、はい。すみません」

慌てる店員を尻目に、死神さんは落ち着いてパフェを受け取って食べ始める。そして一言

「納得出来たか？」

「……………」

納得はまだ出来ない。ただ少なくとも普通じゃ無い

「……………死神さんは俺を殺しに来たって言っていましたよね？」

それって寿命なのか？

「ああ。お前の魂が欲しくてな。私とお前は相性が良いんだ、喜んで良いぞ」

「……………」

「む。……………そうだな、正確に言えば私はまだ死神では無い」

「そ、そうなんですか」

「死神になる為には現世での実習と、自分が使い魔にしたい死者の魂が必要なんだ。その使い魔に私はお前を選んでやったのだ」

「つ、使い魔？」

「ああ。相棒の事だ」

「使い魔……死者……」

「む？」

そんな設定で俺は殺されなくちゃいけないのか？

……嫌だ

「む」

俺が黙っていると、死神さんは不満そうに唇を尖らせて、

「嬉しくないのか？」

「嬉しくないよ！ てか文句しかないよ！！」

「そ、そうなのか？ 中々なれるものじゃないのだが……。しかしもう父に書類を出し、許可も取ってある。一つ願いを叶えてやるから諦めろ」

「ち、父？」

しかも書類って……

「願いは何でも良いぞ、頑張つて叶えてやる。だからその後は一緒に地獄へ行こう」

地獄！？

「い、嫌だよ！」

「む、とにかくお前の死は決定だ。ほら、早く願いを言え」

「ひ、酷すぎる……………うん？　願い？」

「うむ」

「何でも？」

「うむ」

「なら俺を見逃して」

「駄目だ」

「……………」

「願いを増やせとか、長生きをさせてくれとかの寿命関係も駄目だぞ。願いの期間は、今日より一年間だ」

「い、一年？」

「死にたくなさそうだから一年は殺さん、実習もあるしな。お前も一年あれば整理付けられよう」

「たった一年……………」

「人の命は短い。その短い命の中で、己の願いを叶えられるのは極々一部だ。それが苦もなく叶うと言うのだぞ？　一年で十分では

ないか」

「頼んで無いよ!」

俺は伝票を乱暴に掴み、椅子から立ち上が……れない!

「何で!?!」

「魂縛だ。先程鎌を振るつた時、お前の魂に刻んでやった」

「刻む!?!」

「ああ、お前の主が誰なのかをな。主の命には逆らえまい」

「相棒じゃないのかよ!」

なんだよ主って!?!

「とにかく願いを言え。地位か? 金か? それとも女か?

……むうスケベめ」

「そ、そんな。まさか本当に死神……」

俺、死ぬの? たった後一年で? そんな……

「む? ……っ!? な、泣くな! 私が悪い事をしているみた

いじゃないか!」

「う、うう……し、死にたく無い、死にたく無いよ……」

「……むう。人間は欲の固まりだからアツサリ願いを言つと聞いていたのに」

「どんなに欲深くても、代わりに一年で死ぬって言われたら誰も願ひなんか言わないよ！」

「……ぬ。そ、そうか、叶えてから言うべきだったのか」

「うう、ぐず……バ、バーカ、バーカ」

「むう……しかしもう遅い。願いが無いのなら仕方がないな。私にとつてもお前にとつても残念な事だが、適当な願いを叶え、お前の魂を強制的にもらいうける」

死神さんは立ち上がり右手を振る

「残念だ」

鎌を出し、構えた死神さんは本当に残念そうに呟いた

「それではお前の願いを叶えよう」

ほ、本気だ。死神さんは本気で俺を！

「そうだな、お前スケベそうだから」

し、死ぬ？ 俺が？ 嫌だ、死にたくない、まだ死にたくない！

「願ひは……」

願い、俺の願い、俺の願いは!!

「父秘蔵のスケベ本を」

「満足させてくれ!」

「……………ん?」

「死んでも後悔が無いぐらい満足した一年を俺にくれよ!!」

「願いは一つだ。お前が何に満足するか知らないが、そんな曖昧な……………」

「あゝもう! なら俺の彼女になってくれ!! めっちゃ好みだ、
こんちくしょう!!」

もうどうにでもしろ! 殺すなら殺せ!!

「か、彼女?」

死神さんは目をパチクリとさせ、困り顔をする

「出来ないのか! なら諦めて別の所へ行けよ!」

「ぬ、ぬう、彼女か……………しかしお前ら人間がする様な精行為などは
出来ないと思うぞ? 私は女では無いからな」

「ええ!?!」

今日一番驚いた

「お、男の方？」

「男でも無い。そもそも私は人間では無いのだ。今はただ、人間と同じ形をとってるだけなのだ」

「はあ、そうなんですか」

よく分からないけど、ビックリし過ぎて逆に落ち着いて来たよ

「む。……む、意外と強い……いや、かなり強い願いだな」

「え？」

「お前の魂が輝きを放っている。よし、いいだろう、その願いを叶えてやる。今日から一年、私はお前の物だ。喜べ」

「わ、わ〜い……」

パチパチ、パチパチ

聞いていたのか、カフェ内に居たお客さんや店員が拍手を送ってくれた

「おめでとう！」

「良かったね、感動したよ告白」

「……………あ、ありがとうございます」

正直、まだ何が何だか分からない。夢オチって可能性も捨ててない

「あいす溶けた」

「お、おかわりする？」

「む。……してやる」

「す、すみません、注文の追加を！」

何はともあれ、俺にも初めての彼女が出来たらしい。ただ

嬉しく無いです

「はい、「ご注文は？」

「ぶるべり」

「パフェのブルーベリーを、お願いします」

心底、嬉しく無いです

「はい、「ご注文のブルーベリーパフェです」

「……む。ぶるべり侮りがたし」

「……はあ」

ため息しか出ないや

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5594g/>

死神さんと365日

2012年1月10日04時46分発行